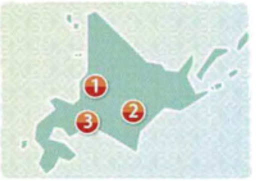
ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文　北原 次郎太　　絵　小笠原 小夜

アイヌ文化のページ「ミンタㇻ」が今月から新しくなります。アイヌ民族や文化にゆかりのある先人たちの物語「シンリッオルシペ」というコーナーを始めます。監修は、佐々木利和・北大客員教授です。「読んでみよう」は、例えばミンタㇻのㇻなど、日本語にはない表記の読み方を中心に学びます。若いアイヌの人へのインタビュー「ヘカチ　マッネカチ」と、地名のクイズは交互にのせます。ご愛読ください。

クイズ



道内にはアイヌ語が基になった地名がいくつもあるよ。あなたは読めるかな？

①**須麻馬内**（滝川市江部乙町）　②**幸震**（帯広市）

③苫小牧市**植苗**　　　　　　　　＝答えは紙面の下に

読んでみよう

ミンタㇻの記事では、アイヌ語を書くとき、カタカナの「ラ」「プ」などを小さくしていることがあります。それらは、日本語の「ラ」や「プ」とは少しちがう音なのです。

言葉は、母音と子音の組み合わせでできています。アイヌ語や日本語の母音は「あ・い・う・え・お」です。子音は、くちびるや歯、舌を使って、息の通り道をせまくしたり閉じたりして出す音です。子音と母音を続けて言うと「か・さ・た・な…」などの音になります。

アイヌ語やニヴフ語、韓国語などは、日本語のすぐそばで話されてきた言葉ですが、母音の後にもう一度子音を発音する音があります。こうした音のちがいを、日本語の文字で表すために、100年ほど前からいろいろな工夫がされてきました。この「小さいカタカナ」も、その工夫の一つです。

「読んでみよう」の内容を、どうしん電子版の動画コーナーで学べます。出演は、アイヌ文化の担い手を育てる活動をしている札幌大学「ウレシパクラブ」のメンバーと、札幌・真駒内桜山小学校4年の河村龍平君です。スマートフォンを持っている人は、ＱＲコードから読みこんでください。

クイズの答え

①すままない　スマ（石）·オマ（ある）·ナイ（沢）。大きな石が多くあるため。もとはスマウマナイだったとも。

②さつない　サッ（かわく）·ナイ（沢）　雨の少ない時期には細くなり、ひあがりもする川。「こうしん」と読みちがえられ、さらに福井県からの移住者が多かったために「幸福」に変わったとされる。

③うえなえ　ウェン（悪い）·ナイ（沢）。飲み水にならない、魚がいない、船で進みにくい、かつて事故があった川などにこの名前がつくことが多い。

地名の意味は「北海道の地名」「アイヌ語地名の研究」（山田秀三著、草風館）を参考にしています

先人たちの物語　シンリッオルシペ

監修　佐々木 利和

アイヌ語を文字で伝承、19歳で生涯とじる

知里 幸恵（1903年～22年）

知里幸恵は、昔からアイヌ民族が口伝えで大切にしてきた話や考え方を「アイヌ神謡集」という本にした人です。

アイヌ語をローマ字にし、自分自身で日本語訳した人は、アイヌ民族で初めてでした。しかも、この本を書いたとき、幸恵は20歳にもならない少女だったのです。

幸恵は明治36年（1903年）に幌別村（今の登別市）で、アイヌ民族としては裕福な家に生まれました。6歳のとき、祖母の知里モナシノウク、おばの金成イメカヌ（マツ）と旭川へ移り住みました。

15歳のとき、モナシノウクとイメカヌのもとへ金田一京助という学者がたずねてきました。アイヌ語研究を本格的に始めたといわれる人です。金田一はモナシノウクたちから熱心に聞き取りを続けました。そして幸恵にも、アイヌ語とアイヌの物語のすばらしさを、とうとうと言って聞かせたのです。

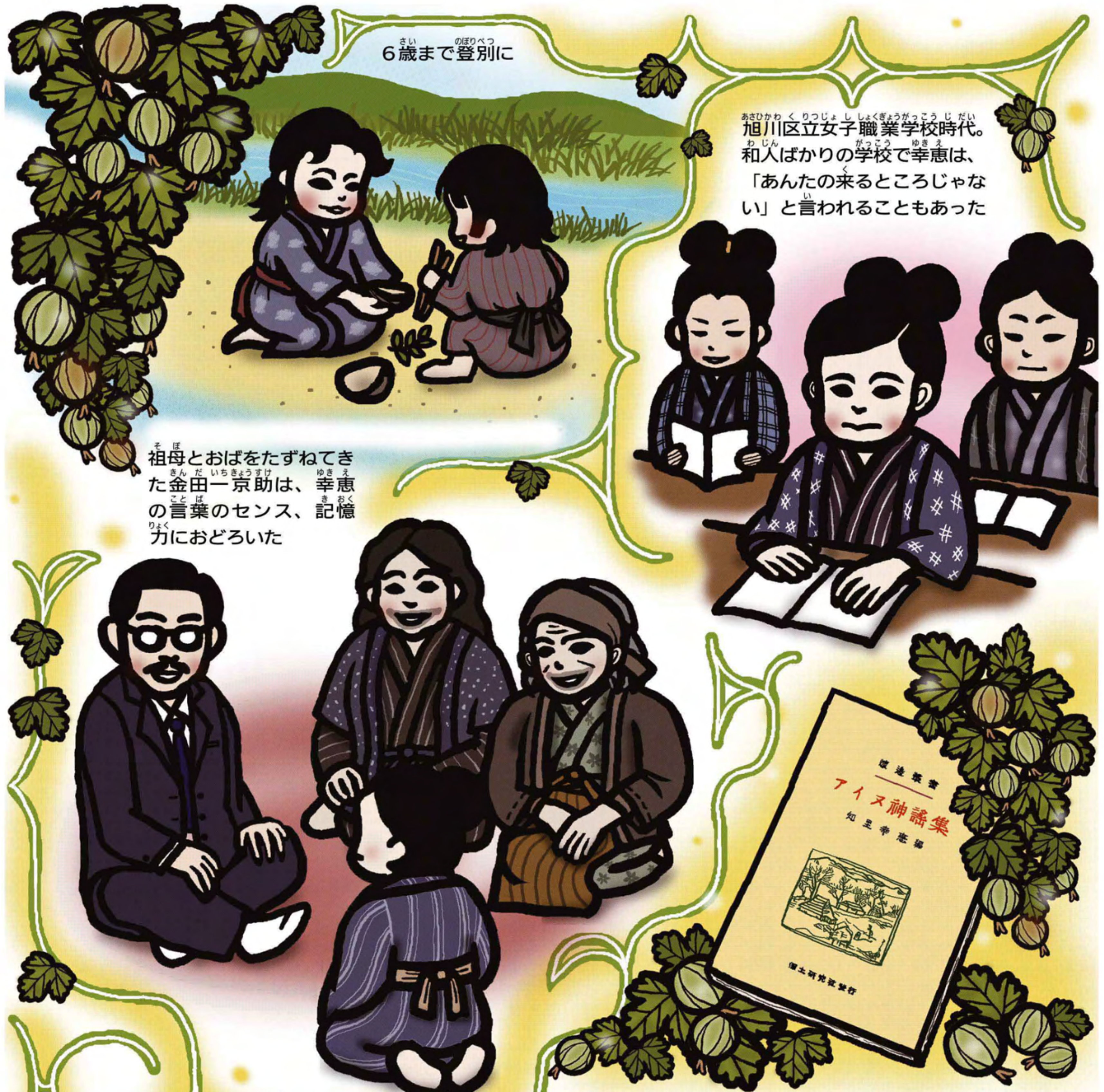
感激した幸恵は、アイヌの文化を残そうと決意し、物語をノートに書き始めました。それを東京の金田一に送り、アイヌ語をどう文字にすべきかの提案もしました。

やがて書きためた物語を、本にすることになりました。大正11年（1922年）5月からは金田一の家にとまりこみ、懸命に原稿を仕上げました。あとは出版するだけとなった9月18日、幸恵は亡くなりました。心臓の病気だったのです。まだ19歳でした。

病気に苦しみながらもすばらしい仕事ができたのは、仲間のため、学問のためにがんばる強い心を持っていたからでしょう。

けれども、年下の子には「学校が全てじゃない。強い心を持ってはばたくのも大事だ」とも言っていました。幸恵の生き方、のこした言葉は、今も多くのアイヌ民族の心の支えになっています。

（敬称略）



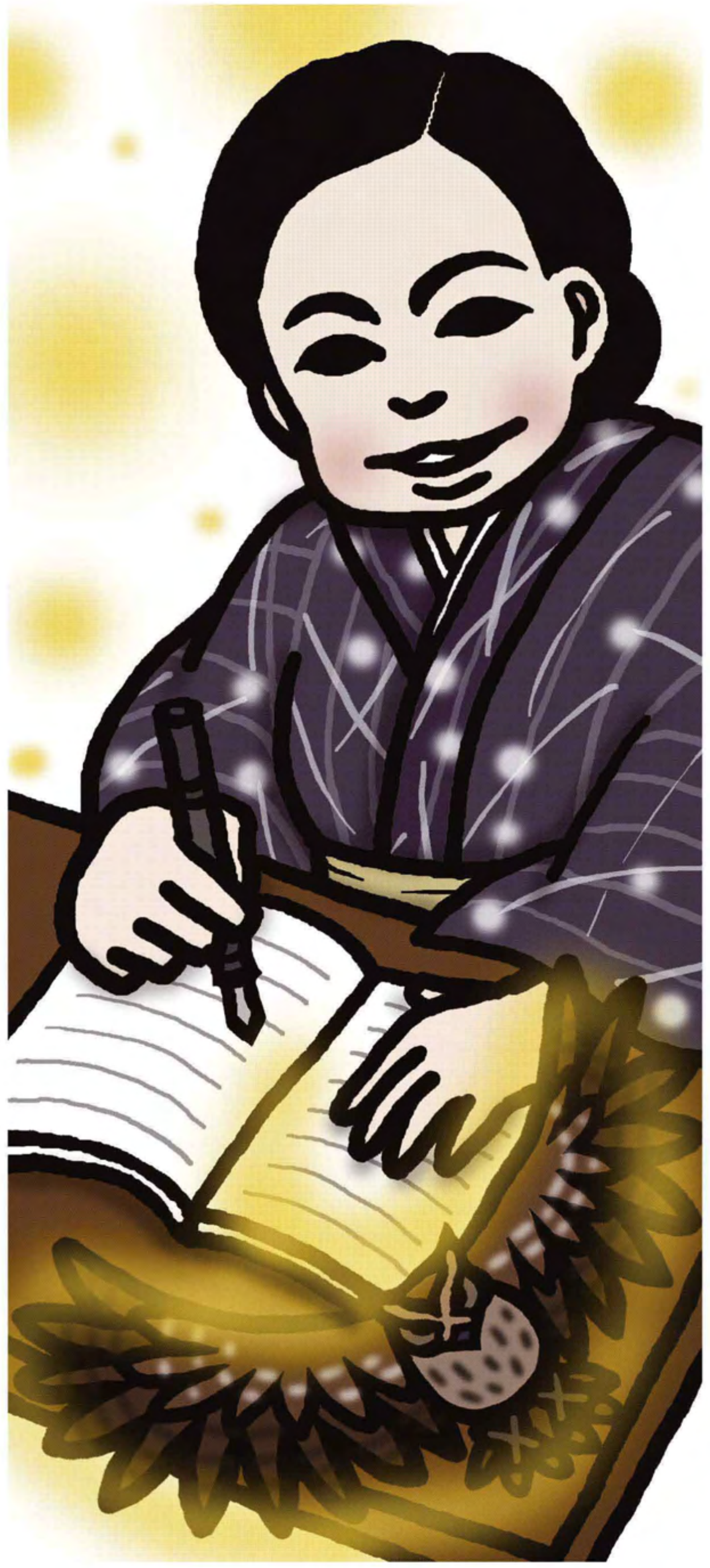
6歳まで登別に

旭川区立女子職業学校時代。和人ばかりの学校で幸恵は、「あんたの来るところじゃない」と言われることもあった

祖母とおばをたずねてきた金田一京助は、幸恵の言葉のセンス、記憶力におどろいた

アイヌ神謡集
知里幸恵編

アイヌ神謡集は、幸恵が亡くなった翌年（1923年、大正12年）にできあがった。郷土研究社から出版され、1978年には岩波文庫におさめられた



日本の「暮らし」求められ

知里幸恵が生まれたのは明治時代の後半です。

江戸時代から明治になると、アイヌ民族の暮らしは大きく変えられました。北海道のアイヌ民族は「大日本帝国」の国民とされ、日本語や日本の暮らしを覚えるよう求められました。

反対に、それまでの暮らしや言葉は捨てなければいけなくなりました。暮らしの激変で、苦しい生活をしている人が多くいました。

学問をし、本を書くことは「男の人の仕事」と考えられていた時代です。幸恵は家が比較的豊かで、おばや母が教育を受けていたこともあり、ローマ字も身につけられました。

ただ、学校では心に傷を受けることもたくさんありました。幸恵が小学校に入って数カ月後、アイヌの子供だけが通う「土人学校」へ移されました。

アイヌを差別する先生も多く、高等小学校で和人といっしょのクラスになると「高等に来るとは生意気だ」といやがらせをされました。

今の北海道は色々な言葉や文化を持つ人が暮らし、みんなが同じ学校で勉強するのが当たり前になりました。幸恵が望んでいたこの世の中を守っていくことが大切です。